

21. 甲状腺分化癌の肝転移例の検討

中駄 邦博 加藤千恵次 鐘ヶ江香久子
 志賀 哲 望月 孝史 山室 正樹
 塚本江利子 伊藤 和夫 玉木 長良
 (北大・核)

われわれの施設で過去 10 年間に ^{131}I 治療を行った甲状腺分化癌遠隔転移 99 例中 4 例(乳頭癌 2 例, 濾胞癌 2 例)が組織学的ないし画像診断上肝転移あり, と診断されていた. 4 例中 3 例は他臓器への転移をともない, 2 例は肝転移が多発性, 2 例では石灰化を認めた. 興味深いことに CT で認められる病変に一致して ^{131}I の集積がみられた 2 例は cystic mass であり, うち 1 例は内溶液中のサイログロブリン値は陰性で, 単純な肝嚢胞に ^{131}I が集積していた可能性が示唆された.

22. 早期より ^{111}In -pentetreotide の集積を認めた転移性神経内分泌肝腫瘍の一例

塚本江利子 伊藤 和夫 鐘ヶ江香久子
 加藤千恵次 中駄 邦博 望月 孝史
 志賀 哲 山室 正樹 玉木 長良
 (北大・核)

転移性神経内分泌肝腫瘍を持つ 62 歳の女性に ^{111}In -pentetreotide シンチグラフィを施行した. 原発は脾臓で, 肝腫瘍は生検にて他の腫瘍と診断されていたが, 嚢胞液にガストリンが高値であったため転移を疑われた. ^{111}In -pentetreotide は静注直後よりよく集積し, 48 時間後まで腫瘍内の分布が観察された. 早期よりの集積は腫瘍の血管増生を反映していると思われる. 肝腫瘍は手術され, 神経内分泌腫瘍の転移と確認された. ^{111}In -pentetreotide はソマトスタチンレセプターの分布をよく表し, 病理組織診断の困難であった肝腫瘍の診断に有用であった.

23. ^{123}I -metaiodobenzylguanidine (MIBG) が集積を示した胸腺 carcinoid の一例

薄井 広樹 秀毛 範至 山本和香子
 高塩 哲也 油野 民雄 (旭川医大・放)
 佐藤 順一 石川 幸雄 (同・放部)
 小村 景司 牧野 勲 (同・二内)
 三代川齊之 (同・病理)

血中ホルモン (5-HT, 5-HIAA) 値の上昇および生検結果より, 胸腺カルチノイドと診断された縦隔腫瘍の一症例を呈示する. RI 検査上は, ^{67}Ga スキャンで集積を認めず, $^{201}\text{TlCl}$ および ^{123}I -MIBG スキャンで胸部に明瞭な集積を認めた. $^{201}\text{TlCl}$ スキャンでは, 他の縦隔腫瘍との鑑別は困難であったが, ^{123}I -MIBG スキャンで神経内分泌腫瘍であることが裏付けられた. 以上, 本症例の性状評価に ^{123}I -MIBG スキャンが有用であった.

24. 副腎腫瘍において ^{131}I -Adosterol と ^{131}I -MIBG scintigraphy を同時期に施行する場合の一考案

山 直也 藤森 研司 森田 和夫
 (札幌医大・放)

血液学的に決定し難い副腎腫瘍に ^{131}I -Adosterol および ^{131}I -MIBG 検査を同時期に行う場合の注意点について考察した. ホルモンや電解質に明らかな異常を認めない高血圧症例での副腎腫瘍はその由来は判断し難い. そのため ^{131}I -Adosterol および ^{131}I -MIBG 検査を両方行うことも希ではない. しかし, 副腎腫瘍に ^{131}I -Adosterol の有意な集積を認めた場合残存が長期間であり, 同じ ^{131}I 製剤である ^{131}I -MIBG 検査は評価が困難である. また, 皮質系, 髄質系腫瘍の合併例が皆無ではないために, 両者の検査をするならば出荷日を待ってでも ^{131}I -MIBG 検査を優先すべきである.